

恭仁宮跡の四至について

— 近年の調査成果から —

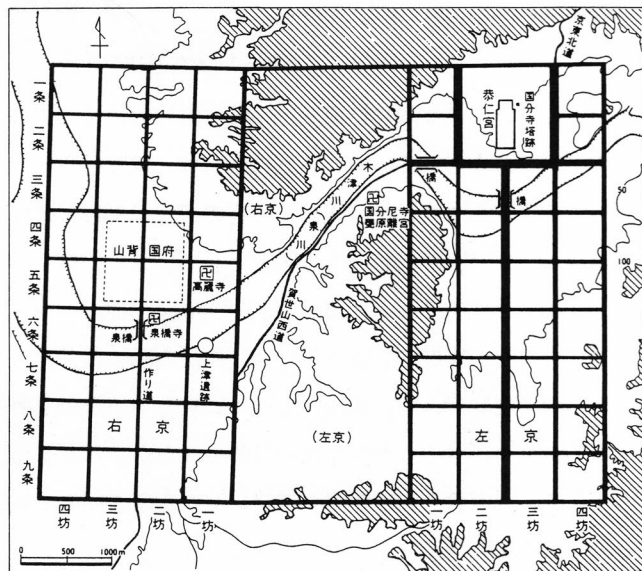
森下 衛

1. はじめに

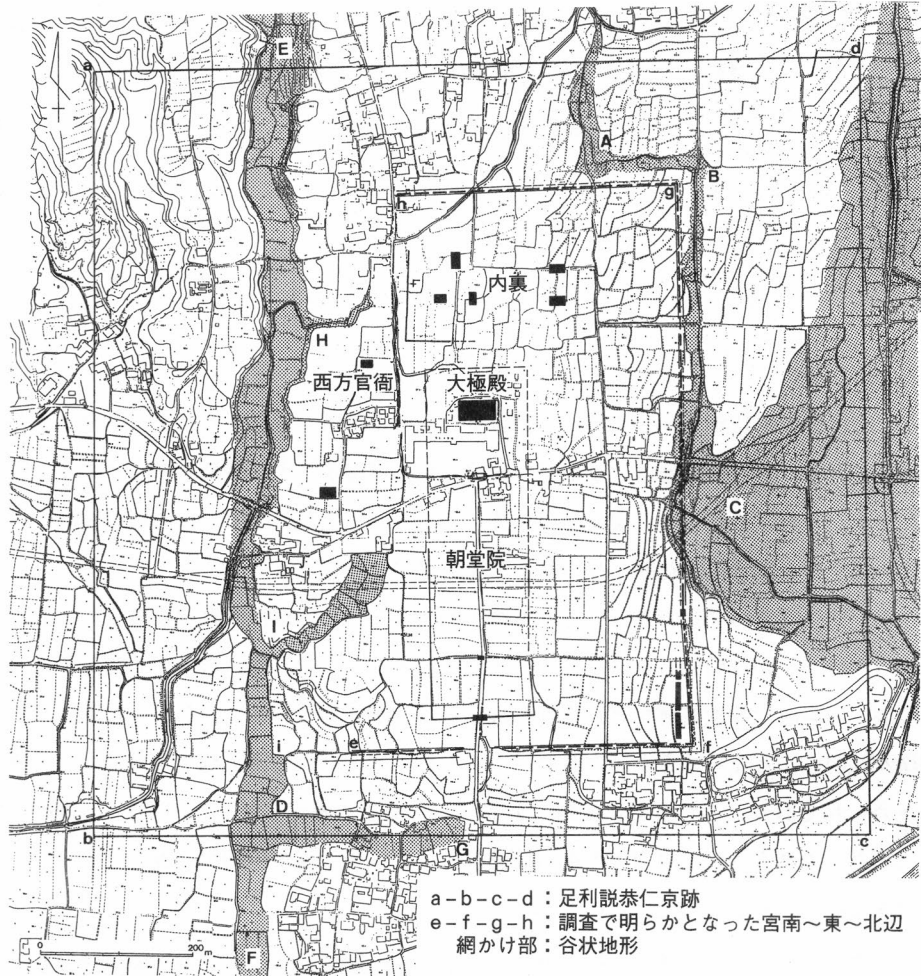
恭仁宮は、天平12年～同16年(740～744)までの約4年間、聖武天皇によって営まれた古代宮都である。その遺跡地は、京都府の南端、相楽郡加茂町大字例幣を中心とする一帯に所在する。一方、これをとりまく恭仁京跡については、加茂町を中心に同郡山城町、木津町の一部を含む非常に広範囲なものとして推定復元されている。^(注1)

さて、恭仁宮跡の発掘調査は、その実態解明を目的として京都府教育委員会によって昭和48年度(1973)から開始され、今日まで22年が経過した。^(注2) この間、宮の中心施設である大極殿跡、内裏跡、朝堂院跡などが次々と確認され、永らく謎の都とされてきた恭仁宮の姿が徐々に明らかとなってきた。とりわけ、ここ数年は、宮跡の四至確定を目的として調査が進められており、これまでに南限・東限・北限が順次確定された。中でも、平成3・4年度にわたって調査された東面南門跡の確認は、これ以後、宮跡の四至を推定する上で極めて大きな手がかりとなった。

ところで、過去、恭仁宮跡に関する研究は数多くあるが、そのなかで最も著名なものに、足利健亮氏の研究がある。^(注3) 氏は独自の理論により、恭仁京が鹿背山を挟み、平城京と同規模の右京と左京それぞれが分離して設けられたとする説を提唱した。宮域に関しては、現在もお土壇としてその痕跡を残す大極殿跡の位置や一帯に残る地割りなどを



第1図 恭仁京復元図(足利氏原図)



第2図 恭仁宮跡全体図

もとに、左京の中央北辺に位置し、平城宮跡における東方張り出し部を除いた約1km四方の宮が計画されたとしている。これに対して、伊野近富氏は、京・宮の形態については足利氏の説を踏襲しつつ、足利氏による宮の復元が平城宮跡の規模を大きなよりどころとして大尺で3000尺(約1080m)四方の範囲としていたのに対して、そこで使用されていた基準尺を小尺であったとし小尺で3000尺(約900m)四方とやや小規模なものとする仮説をたてた。^(注4)ところが、実際の発掘成果では、両氏の説には合致しない部分で宮四至が確認されつつあるのが現状である。両氏ともこれに対して一定の説明を加えておられる。^(注5)その是非については、云々述べることは本稿の目的ではない。ここでは、ここ数年の調査に携わった一人として、近年の恭仁宮跡四至確定に関する調査成果を概観し、宮四至復元に関する問題点や今後の展望等について少し述べてみたい。

2. 近年の調査成果から

(1) 恭仁宮の主軸方位と造営尺

ここでは、まず基本的な事項の確認として、今までの恭仁宮跡発掘調査で確認された宮内施設の主軸方位と造営に際して使用された基準尺についてみておく。

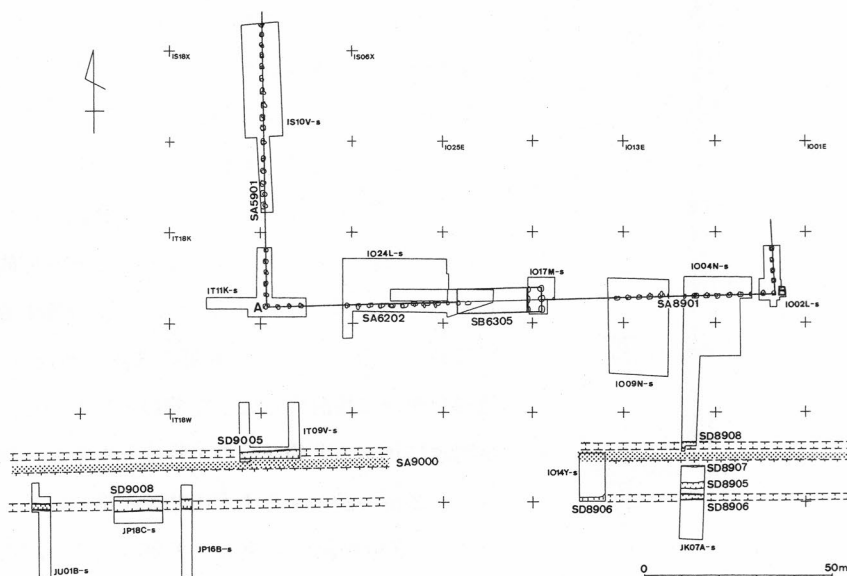
これまでの発掘調査で検出された遺構を概観すると、各所で主軸の方位がずれる場合が多くある。これは宮跡の立地する台地が、極めて起伏に富んだ地形を呈していることに起因すると思われる。『続日本紀』によれば恭仁宮造営がかなり旧ピッチで進められた経過がみてとれ、こうした起伏に富んだ地形を十分な造成もせず工事を進めた経緯は十分指摘されよう。こうした地形等から生じた当時の測量上の誤差と思える主軸の振れを別として、恭仁宮跡の遺構に関する主軸を見てみると、多少の幅はあるものの、およそ北に向かうに従い西方へ 1° 振る($N-1^\circ-W$)という方向性を認めることができる。

一方、恭仁宮の造営尺については、これを確認できる資料は少ない。唯一、朝堂院を囲む一本柱列(柵列もしくは塀)の南東・南西それぞれのコーナー間の距離が、定点間の距離を導き出せる資料である(第3図A・B間)。この距離は、直線距離にしておよそ134.2mあり、これは1尺を0.298mとした場合の450尺に極めて近似^(注6)する。以下の記述では恭仁宮造営における基準尺をこの0.298m(小尺)として進めることとする。

(2) 宮南・東辺部の調査

① 宮南辺部の発掘調査

では、実際近年実施されてきた宮四至確認に係る調査成果を順次みていくことにする。



第3図 宮南辺部調査成果図

まず宮南限部では、平成元・2年度の2ヶ年にわたって調査が行なわれた。その結果、足利説で朝堂院南限とされてきた東西に延びる水田畦畔が宮南限に相当することが確認された。これら一連の調査成果は第3図に示したとおりである。

大極殿跡(中心)から約406m南方で朝堂院(朝集殿院)南限ラインが確認されていた(昭和62～平成元年度調査)が、そこからさらに約40m南側には東西方向にほぼ一直線に続く水田畦畔があり、この北側と南側の水田面では比高差約2mを測る。調査では、この畦畔部分が築地(南面大垣)の痕跡であることが確認された。

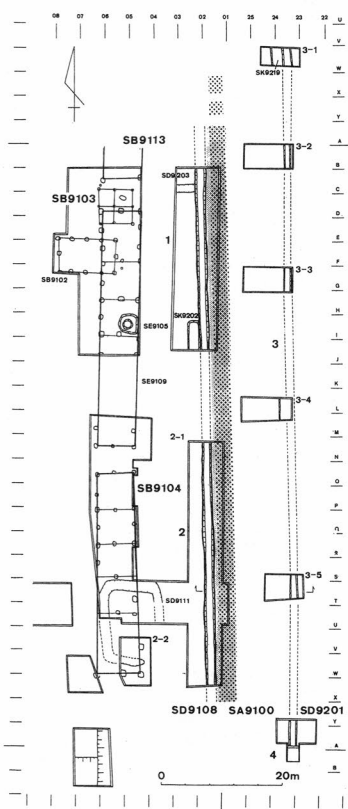
検出された主な遺構は、畦畔を挟むその南北両側で心々間約13.1m(約44小尺)を測る2条の東西溝(S D9005・9008及びS D8908・8906)のみであった。しかし、畦畔下部の土層が築地基底部を思わせる盛土であったことや、両溝間の距離が平城宮跡における堀地ならびに南面大垣基底部を含んだ規模にほぼ該当すること等から、これが恭仁宮南面大垣の遺構と判断されるに至った。すなわち、ここでは築地本体の確認できなかったものの、北側の溝が築地北側雨落ち溝に、畦畔部が築地基底部にそれぞれ比定され、築地南側雨落ち溝は未確認であるが、そこから畦畔の南側で確認した溝までがいわゆる堀地と呼ばれる空間

に相当するものと判断されたのである。なお、ここで確認された宮南限ラインは、大極殿跡の中心から直線距離にして約446m(約1500小尺)を測る。

②宮東限部の発掘調査

宮東限の確認調査は、平成3～5年度にわたって行なわれた。第4～6図はこの一連の調査のうち、主要な3地点の調査成果を図示したものである。第4図が南東隅付近、第5図が東面南門跡、第6図が推定東面北門跡付近のものである。

さて、先の南限確認によって、足利説に比べ、実際の恭仁宮跡の範囲が小規模なものである可能性が高まり、なおかつこれが地形の段差に合致するように確認されたことから、東限の確認にあたっては、地形を十分に検討することを前提とした。その結果、足利説に比べると約2分の1程度となるが、地形的に1～2mの段差をなす水田畦畔が南北に長く続くライン(宮中軸線から東方へ約268～280m；900～940小尺)が明瞭に確認され、これを東限の大きな手



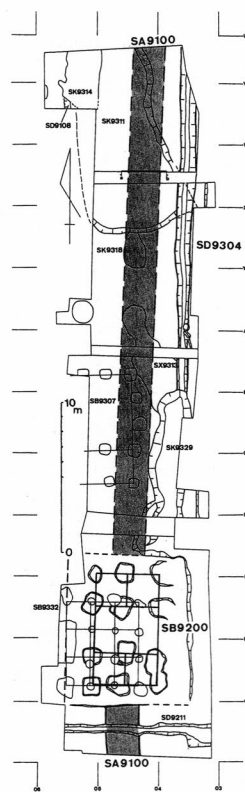
第4図 宮東辺部調査成果図(1)

がかりとして調査が進められた。まず、第4図に示した宮南東隅付近の調査では、まさに上記の南北畦畔を中心として、南面大垣の場合と同様な状況で東面大垣に関する遺構が検出された(SA9100)。すなわち、畦畔を挟み、心々間で約14mを測り平行して走る南北溝が2条(SD9108・9201)検出され、やはり畦畔下部の土層は築地基底を思わせるように盛土されていた。ただし、ここで検出された東面大垣の痕跡とされたものはN-2°-Wと、先にふれた恭仁宮跡の主軸(N-1°-W)に対しておよそ2倍近くの振れををもって北上することとなる。これでは、宮南東隅部が東方へ張り出す格好となるなど、不確定な面が多々残された。このため、東面大垣確定のためには、より広範囲での調査が必要となった。

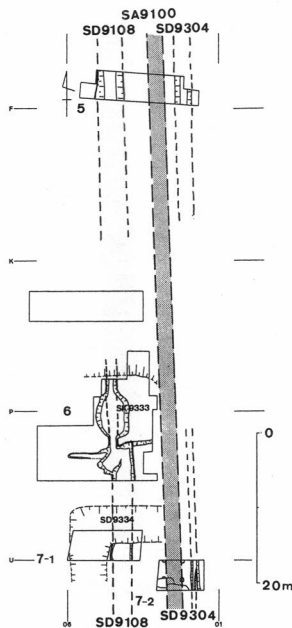
その一つが第5図に示した地点である。先に確認した想定東面大垣(SA9100)の北方延長上で、なおかつ図上で復元される宮南東コーナー部から北方へ約185~200m付近に位置する。ここでは、その南端付近で、門跡と考えられる2間×3間の南北棟礎石建物跡(SB9200)が検出され、その南北両側では基底幅約2.1mに復元される築地を確認した(掘りこみ地業及び東側雨落ち溝と考えられるSD9304を確認)。SB9200は、中央の柱間が3m(10尺)、その他が2.1m(7尺)の八脚門に復元され、大垣に設けられた門跡としては小ぶりと言わざるをえない。しかし、ここではその位置関係などから、これらが東面大垣(SA9100)並びにこれに取り付く門跡(位置からみて東面南門と考えられる)と判断された。なお、SB9200の検出位置(中心)は、想定される宮南東隅部(南面大垣北側溝;SD8908)から北へ約186m(約625尺)、宮中軸線から東へ268m(約900尺)を測る。また、SA9100はSB9200を境にその北側では逆にN-1°-Eの方向で北上していくことが確認され、ここで方向の修正が行なわれているらしいことも合わせて確認された。

一方、第6図に示した調査地点は、先のSB9200からは350~400m北方に位置し、東面北門跡の想定位置付近にあたる(平城宮跡を参考とすると宮各辺に各三門が開いていたとされており、先の門跡が東面南門跡とすれば、ここから宮南限までの距離;約186mを2・3倍することによって中門、北門それぞれの位置が想定される)。

調査の結果、残念ながら中世期の自然流路によって、門跡想定位置は既に大幅な削平を受けていた。辛うじて、その周辺部で心々間約7.4mを測り、平行して走る南北溝を2条



第5図 宮東辺部
調査成果図(2)



第6図 宮東辺部調査成果図(3)

(溝SD9108・9304)検出したにとどまる。位置関係から、この2条の溝は大垣(SA9100)の西・東両雨落ち溝に相当すると考えられる(埴地並びにその東側に位置するSD9201の延長部は未確認)。なお、ここでは、このうち西側の溝が鍵の手に折れ曲がる箇所が確認された(第6図6調査地点)。検出状況からみて、この屈曲部が門跡の南西コーナーに相当する可能性もある。これが門跡の南西コーナーとすれば、東面北門跡ということとなるが、これから復元される門跡は、想定位置(宮南限から北方へ約186mの3倍;558mの位置)から南側へ10m近くずれることとなる(あくまで中心の位置)。ここでは、この付近に東面北門跡が存在した可能性が高いという点だけを確認したにとどまざるをえなかった。

(3) 宮北限部の調査成果

以上に記した一連の調査のなかで東面南門跡が確認されたことは、宮四至の確定を進める上で非常に大きな手がかりといえるものであった。すなわち、一つの仮説として、宮がその中軸線で左右対称に計画されたであろうことや、宮四周の各辺にそれぞれ三門が開いていたであろうと仮定すると、宮の全体像を推定復元することが可能な状況となってきたのである。まず、東面南門跡の検出位置と宮中軸線並びに宮南限ラインとの関係を見ると、中軸線—東面南門跡間の距離は約268m(この数字は、上記の東面北門跡推定位置付近で検出した東面大垣西側溝心から中軸線までの距離268mにほぼ一致)で、小尺0.298mとすれば約900尺という数字が導きだされる(なお、東方へ張り出す格好となる宮南東隅付近ではおよそ10m近く広がる)。一方、宮南辺ラインから東面南門跡までは、先にも述べたごとく約186mで、これを4倍した約744mが宮の南北長に近い数字となり、やはり小尺0.298mで換算すればおよそ2500尺という数字が導きだされる。すなわち、恭仁宮は南北2500小尺、東西1800小尺(900尺の2倍)の長方形であったと復元されるのである。無論、これらは恭仁宮の計画ラインが恭仁京を含めどういった基準線をもとに設定されたか不明な現状ではあくまで一つの目安に過ぎない数字であり、細かくみれば大垣のどの部分とどの部分の間がこういった距離になるのかも明確ではない。ただ、南・東辺ではこのライン上に比高差1~2mを測る水田畦畔が認められ、地形的に一つの境界になっていることについては既にふれた。さらに、先に東面中門跡や同北門跡の想定位置について述べたが、周囲の地割りに照らし合わせると、東面中門・北門跡想定位置に

向かって現在は道路として利用されている大畦畔が通る。すなわち、東辺部を中心としてではあるが、周囲に展開する条里地割とは異なる長方形の地割りが認められ、あたかも京城における条坊地割の痕跡を思わせるごとく、この境界が門跡想定位置に合致するように展開している^(註7)のである。

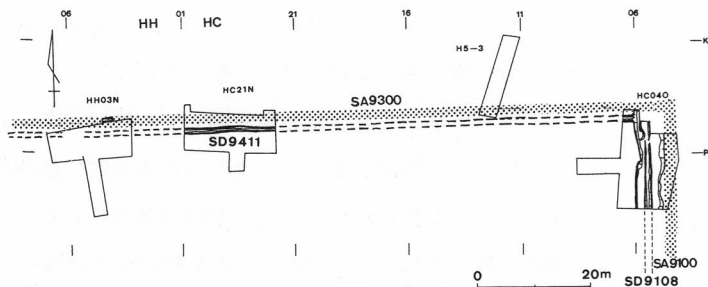
実は、続いて紹介する北限部についても、民家が密集する西半部ではやや不明瞭ながら、東半部を中心として宮南辺ラインから約744mの箇所にほぼ一直線に水田畦畔が連なっている。しかも、これが宮東限ラインと交差するあたりでは、北方の丘陵部から流れ出る小河川がこのラインの直前(第2図A地点)で流れを直角に東方へ変え、東限を越えたところ(同B地点)で再び南方へ直角に流れを変えている。あたかも、北辺及び北東コーナーが意識されている如くである。

こうした点を確認した上で実施した北辺部の調査であったが、その成果は第7・8図に示した。結果的には、想定ライン上で北面大垣と思える大規模な築地遺構(SA9300)が確認され、ほぼ想定どおり北限が確定された。また、想定宮北東コーナーでは北面大垣南側雨落ち溝と東面築地西側雨落ち溝とのコーナー部も確認された(第7図)。SA9300として確認した遺構は、幅約5mの平坦面(版築によって形成される)とその北・南側にある幅1.5~2mの溝(SD9302・9303)である。ただ、SA9300は全体に遺存状況が悪く、良好に築地遺構が確認されたのは大極殿跡の北方部に限られ(第8図)、その他の地点では南側ないしは北側の雨落ち溝(SD9411・9413)が辛うじて検出されたにとどまる。このためもあってか、南・東面大垣のように堀地は確認できておらず、その存在も不明である。

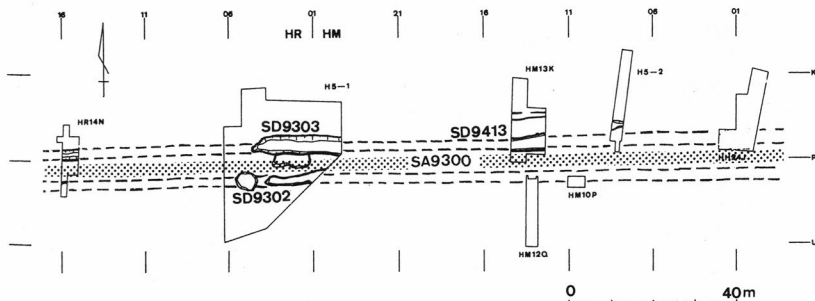
なお、確認された北辺ラインは西へ向かうに従い南方へ約2°の角度で振れる。これは先に示した恭仁宮跡の遺構の振れからすると若干大きく、北東コーナー部で東辺ラインとの間で形成される角度は約89°となる。

またこの北辺部の調査では、先述の北方丘陵部から流れ出る流路が東側へ屈曲する部位(第2図A)のすぐ南側を発掘した。この際の所見では、元来そのまま南流していた流路が埋没した後、その上

面を整地して大垣が造営された如くであった。同一の流路跡は、この南側延長部で行なわれた昭和63年度の調査においても検出されている。



第7図 宮北部調査成果図(1)



第8図 宮北部調査成果図(2)

ここでは、恭仁宮造営期に谷地形を埋め整地していること、さらに国分寺造営期に再び整地し国分寺の東辺築地が造営されていることなどが確認された。^(注8)こうした調査成果を総合し、この流路は恭仁宮の造営に関連して流れが変えられたものと判断している。

(4) 西辺部の状況

西辺に関しては、未だ調査が実施されていない(平成7年度から一部調査着手)。ただ、先の推定復元ラインを現地地形図にあてはめると、想定ライン北半部を中心に北方の丘陵から南流する幅約50mの谷筋と重複する。^(注9)この谷地形の中では、これまでの南～北限のように現地地形や地割りに大垣の痕跡を追うことは極めて難しい。しかし、現状の地形を見てもこの谷筋以西は極めて起伏に富んだ地形を呈しており、一見、谷状地形部が宮内外の境になることは明確である。また、辛うじて宮南西コーナー付近(第2図 i - I 間)では、大垣の痕跡を示すと思える畦畔を確認することも可能である。今後の調査に期待したい。

3. まとめにかえて—今後の展望—

以上の如く、恭仁宮四至の確定ももう一步のところまでできたといえる。しかし、その一方で様々な問題点も浮かび上がってきた。

その一つは、宮内部に関する点である。従来の見解と比べ小規模なものとなった恭仁宮では、無論それまでの宮であった平城宮と同様の宮内施設が設けられ、また配置されたと考えられない。こうした宮内部の各施設がどのように計画され、そして配置されたかといった点は今後十分に検討されなければならないだろう。

またもう一方では宮外部、すなはち京域に関しても問題が多い。従来からいわれるように、地形図を見る限り、京域が広がっていたとされる範囲に条坊制の痕跡を確認することはできない。まして、宮が長方形であることがほぼ確認された現在、通常の都城の如く正方形の条坊地割りが施工されていたのかも検討する必要があるが生じてきた。というのも、先に示したように宮跡東辺を中心に復元ラインに沿うような特異な地割り(宮域の相似形

に近い東西約140m、南北約190mの地割り)が認められるのである。ただ、さらにその周辺域というと、条里制地割りが認められるにすぎず、この特異な地割りが恭仁京の条坊の痕跡を示すものであるなら、宮周囲の非常に限られた範囲にのみ遺存していることとなる。なお、宮南・東辺部の調査では、それぞれで大垣の外側に道路遺構の存在を思わせる溝を検出しているが、広範囲に良好な状態で検出できたものは無く、京城存在を含め、今後の課題といわざるをえないのが現状である。

いずれにしても京城の有無及びその形状といった点は、恭仁宮の歴史的意味を考える上で重要な意味をもっているといえる。また、宮の四至に立ち返ったとき、これがどういった計画線を基準に設計、造営されたかを再検討するうえでも欠かせないものである。

なお、京城に関しては、一連の調査の中で注目される地点も幾つか認められた。そのなかで、まずあげられるのが、宮の東～北東に位置する一画である。宮北東部には、やや傾斜をもつものの宮域より一段高くなった微高地がひろがり、実際調査をおこなっても建物跡や土器片、瓦片が出土する。『続日本紀』によれば宮の北東には園池状の施設(城北苑)が存在したように記され、またその所在は不明ながら宮の周辺には、甕原離宮(木津川を挟んだ南西岸の現法華寺野に比定)や石原宮(所在不明)の存在が確認され、皇后宮^(注10)などの存在も想定されている。現状では、特定は難しいものの、こうした施設のうちいずれかが宮の北東部に設置されていた可能性もある。また、先に宮東辺部を中心として条坊の痕跡の可能性のある地割りが認められるという点は、こうした安定した地勢を呈することと無関係とは思えず、上記の恭仁宮関連施設の造営に限らず、宮周辺部ではいち早く条坊が施工され、高位な貴族層の邸宅が営まれた可能性も考えられよう。

問題はつきないが、最後に現地形を観察した上で、宮造営に関する恭仁宮の特色について気づいたことを一つ述べておきたい。というのは、先に記したように、宮の西・東・北の一部については北側の丘陵部から流れ出る自然流路に手が加えられ、あたかも大規模な堀とでも言える谷地形ないしはその痕跡が巡る状況となっている点である。そこで同様のものが南辺付近に存在しないかどうかを検討した結果、過去に足利氏が二条大路の痕跡ではないかとされた東西に一段低くなった部位(第2図D-G)が目についた。これは宮の西側の谷筋の延長部と宮南西コーナーから少し南側へいったところで合流し(同図D地点)、さらに南流していた痕跡をとどめている(同図F地点へ)。これが溝であるなら、恭仁宮の四至は溝(堀)とでも言える施設でその大半が囲まれていた可能性が想定されるのである。無論、これは京城との関連もありうかつなことは言えない。ここでは、堀状施設^(注11)の存在を指摘するにとどめ本論を終わりたい。

なお、本稿の作成に当たっては、恭仁宮跡発掘調査を共に担当した磯野浩光、森 正、

鍋田 勇の各氏に様々な面で御指導・御助言をいただいた。記して感謝の意を表します。

(もりした・まもる=当センター調査第2課調査第3係調査員)

注1 足利健亮「恭仁宮域の復元」(『社会科学論集』4・5号合併号 1973)

注2 恭仁宮跡発掘調査の成果に関しては、各年次毎に刊行されている概要報告に詳述されている。以下の記述に際しても、この概要報告をもとに述べることとする。

「恭仁宮跡昭和48～平成4年度発掘調査概要」(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概要(1974～1996)』1974～1996。第3～8図についても、上記文献からの転載である。

また、宮内部並びに南限に関しては久保哲正氏がその概略をまとめている。

久保哲正「恭仁宮の造営について」(『長岡京古文化論叢Ⅱ』中山修一先生喜寿記念事業会1992)

注3 注1に同じ

注4 伊野近富「恭仁宮と恭仁京の復元」(『京都考古』第63号 1991)

注5 足利健亮『考証・日本古代の空間』1995

伊野近富「恭仁宮・恭仁京復元案の副案」(『京都考古』第65号 1992)

注6 なお、調査の概要報告でも既にふれているが、この両コーナーでは、南東部が推定される宮中軸線(大極殿跡の中心座標をもとに上記の宮跡の主軸のふれを勘案して割り出したもの)からすれば、東方へおよそ20尺張り出す格好となる。このため、朝堂院は、東西幅およそ430尺(小尺)の規模で計画されたが、何らかの理由でその南辺で20尺分東方へ張り出していたようである。

注7 既に足利氏は前掲論文(注1文献)中で、恭仁宮跡をとりまく地理的環境を詳細に検討されており、一連の調査で明らかとなってきた宮四至に関する地形の段差や旧流路などについても着目されている。ただ、氏の論の根底にある、恭仁宮の基本設計が平城宮よりちいさくはないといった視点からか、こうした微地形の変化が宮四至に関わる点については述べておられず、むしろ宮内の諸施設である朝堂院や内裏といった施設の区画と理解されている。

注8 「恭仁宮跡昭和63年度発掘調査概要」(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概要(1989)』1989)

注9 北方丘陵から流れる谷部が宮西限に関わる点や、宮北東隅の流路がやはり宮四至に関わる点については、既に中谷雅治氏によって指摘されていた。

中谷雅治「恭仁宮の造作工事について」(『角田文衛博士古希記念古代学論叢』1983)

注10 小山雅人「軒瓦からみた恭仁の皇后宮—恭仁宮北東周辺部の問題—」(『京都府埋蔵文化財情報』第53号) 1992)

注11 ただ、地形図上での計測ではあるが、南北の谷状地形部間距離(同図A B—D G)は約900m(約3000小尺)、また大極殿跡から東辺の谷状地形部までは約300m(約1000小尺)を測り、恭仁宮の造営に際しての基準線とも言うべきラインはこのあたりに存在するようにも思える。